
anotherからの分岐点

アホの子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

anotherからの分岐点

【コード】

N1642P

【作者名】

アホの子

【あらすじ】

IS・インフィニット・ストラトス・は女性にしか扱えない。

筈だった。

「結局姉さん言われた通りここまで来ちゃったけど。ばれなきゃいいなあ。」

【もしものときはあたしに変われば良いじゃない。】

あれっ、最初からそうすねばいいんじゃないかね？

prologue 略してぶるぐ

某日

俺はとある試験会場にやって来ていた。

先に言っておくが、俺は男だ。

1週間ほど前に姉から連絡を受けた。

内容は簡単。なんでも「なんとなくISに書類送ったら通っちゃった ミテキトウニ試験受けてきてねはあと。」

馬鹿だろこいつ。

そんなんでも一応俺の姉なのだ。かなしかな。

「これ絶対ばれるだろ。ISを生で動かさなきゃいけないみたいだし。」

【困った時はあたしに変われば良いじゃない。】

「せいぜい頼むよ咲夜。ん？待てよ、これ最初からお前にパスすりゃ良かったんじゃない？」

【あ、担当っぽい人来たわよ。】

一人の女性がちかづいてくる。す、凄いオーラだ・・・。

思わず姿勢を正して挨拶してしまう。

「その君、今から試験を行う。ついてこい。」

「はっ、はい！」

思わず声が裏返ってしまう。緊張の為か歩く形がぎこちなく感じる。その様子を察したのか、その教師は緊張を解すためにも幾つかの質問をしてきた。

「君はなんていう名前なのだ？」

まあ会話の始めとしてはとてもベターな質問だ。

「し、不知火 楓です．．．。」

ただたどしくも答えると、その教師は驚いたように振り返った。

「不知火？そういえば私の友人にそんな奴が．．．。ふむ、確かに良く似ている．．．。そうか思い出したぞ！紅葉の妹の楓か！大きくなったものだな。」

まるで知った風に聞くその口調から姉貴の知り合いだということが判明した。

なんか引つ掛かるな。織斑．．．？．．．．．。

あ、どつかで見たことあると思えば。この人俺の友人のお姉さんじゃないか。

名は確か．．．

「千冬．．．さん？」

少しずつ記憶が鮮明になっていく。そうだ、織斑千冬だ！あの第二回モンド・グロツソの優勝者^{チャンピオン}

「そうだ、私が織斑千冬だ。思い出して貰えたか。」

「あの一！！」

千冬は足を止めて此方を見る。そのあまりのスタイルの良さに少しドキツとしたが直ぐに忘れた。

「今日は宜しくお願います！」

「ははっ、礼儀正しいな。こちらこそ宜しくな。」

なんだこの人、かっこいいと思つてたら笑顔綺麗過ぎんだろ。

「さあ、着いたぞ。試験内容は簡単だ。あそこに置いてあるISを起動してもらつ。その後、教官を相手に模擬戦を行つて貰うだけだ。」

模擬戦．．．だと．．．！？ISの勉強や触れたことすらないのに

か！？

こいつぁ・・・ヘヴィだぜ・・・。

先程と同じようにぎこちなく歩いてしまう。

待機状態にあるISに面と向かい恐る恐る触ってみる。

すると甲高い音を響かせながら光始めた。

次の瞬間には自分の視点の位置がかなり高くなっていることに気がついた。まじかよ、俺。

「IS動かしちゃってるよ・・・。」

【あら、意外だね。人格も体も男の子なのにね。いえ、ここは男の娘だからとでも・・・。】

「滅多な事を言うもんじゃないぜ。はあどうすんだよ、男の俺がIS動かしたなんて世界初じゃねーの？」

「さっきから何をぶつぶつ言っているんだ？二次試験に移るぞ。」

いやね、独り言とは訳が違うんですよ。だけど咲夜の存在は知らないだろうし。

環境的にも状況的にも何も弁解ができなかった楓は渋々千冬についていく。

そして重々しく開かれたドアの先には広大なアリーナの中心にいる別の教官が待ち受けていた。

「さあ、模擬戦の開始だ。」

【ちょっと楓、動かし方分かるの？】

「ああなんとというか、触れたときにISという存在の片隅を見た気がするんだ。なんだ、つまりはな。行けるかもってところ。」
先程初めてISに触れたとき何かが流れ込んできたのだ。それは声であつたり映像であつたりと、まるでこのISが見たものがそのまま自身にフィードバックされたかの感覚だつた。
そんな思いに耽っていると。ハイパーセンサーから敵機接近の警告アラートが表示される。

「うわっあぶね!!！」

思わず避けてしまったが、それでは試合にならないだろう。
振り向いた先で楓達は絶句した。

教官が壁に激突して自滅していたのだ。

「なん・・・だと・・・!?!？」

通信が入ってくる。どうやら千冬さんからだ。

「試験は終了だ。後は此方で手続きをしておく。」

「はい。っていつかこの場合判定はどうなるんですか？」

「気になるか？」

そりゃあ気になる。対戦相手が自滅だなんてありなのかよ。

「ふっ、決まっているだろう。合格だ、おめでとう。」

どうやらありだつたらしいです。

「ーか合格しちゃったけど、これやばいんじゃないか。」

男一匹女子の楽園とまで呼ばれてしまう場所に突入だと考えると震えが止まらない。怖すぎんだろ。

ならいつそ男だとばらしてしまおうか。

この時の俺は頭がイカれていたに違いない。後悔なんか立たずつていうけど、まさかここまでとは思つても見なかった。

ISのロックを外し、降りるとそこで千冬さんが待つていた。

「改めて合格おめでとう。このあと暇か？校舎を案内するぐらいな

らできるが。」

意を決して口を開く。

「ち、千冬さん！実は俺男なんです！！」
告げた直後。千冬は目を見開いた。

「この容姿で男だと！？」

「突っ込むとこそこじゃねーから。」

ボケた瞬間に突っ込みを入れる。気を取り直して話を進める。

「これは、不味いことになったな。男がISを動かしてしまうなんてな。何か心当たりは？」

「いえ、何も。」

と、千冬さんの携帯に着信が入った。

「もしもし織斑です。はい、なんだと！？今からそちらに向かいます。失礼します。」

空気が変わったことに気づき尋ねた。

「何かあったのですか？」

溜め息を一つついてから話す。

「今年は厄介事が多くなりそうだ。」

第1話（前書き）

FF14並みに作り直し。

第1話

試験が終わり、家に戻った。

二階立ての一軒家に姉貴と二人で暮らしている俺はまず最初に姉貴に結果報告をしようと思った。

ところが。

「お帰り楓ちゃんー！！お姉ちゃんはととてもとても寂しかったdゲボア！！！」

「喧しいわボケ。結果報告するから離れてくれ。抱きつかれたままだと暑い。」

「ーか殴られたのに抱きついたまんまとか化けもんの類いだろ。まあ実際そうだけど。」

なにしろ俺の姉貴はISの操縦者であり、日本の元国家代表だったそうだ。話を聞く限りではその能力は千冬をも越えるものだったらしい。

ちなみに俺は姉貴とは血は繋がってない。俺は「アドヴァン戦闘用遺伝子改造素体^{スト}」と呼ばれる存在らしい。咲夜はそのコントローラーと言うべきか。意図的に組み込まれた戦闘用の人格だった。身体は戦闘用なだけであり大人でも持ち上げることが出来ない岩を片手で持って見せたり、身体能力が人間とは思えないものだったりと結構ぶっ飛んでる。多分本気を出せばタイガー戦車ぐらいなら投げれるんじゃないかね？もちろん、人前では出来るだけ隠し通してはいるけど。

なんで今姉貴と暮らしているかと言うと、なんでも悪の秘密組織に潜入した際、全て潰し終わったあとに赤ん坊の俺を見つけたそうなので以来養子ではなく姉弟の関係で暮らしている。

この事に別に不満はないし、感謝もしている。あの時がなければこの時は無かったからな。

【いつまで説明してるの？】

そんなメタ発言しないでくださいよ。

あと、今話しかけてきたのが咲夜。俺の第二人格。口調からして女だ。だけど体は男だ。男の体で女の人格とか気持ち悪いと思うかもしれないが、問題はない。

どうも俺の体は女性ホルモンの分泌が過剰らしく体つきは殆ど女子だ。おまけに胸まで出ているという始末。もう男子やめちまえよだ？東京湾に沈めんぞ。

「だいたい説明終わり。姉貴、結果から述べよう。合格しちまった。……。」

「さっすが楓ちゃん！お姉ちゃんは誇りに思うよ。可愛い子がIS学園に入るなんて。あとそうそう。」

突然話を切り替えてきた。そんなになにか話したいこともあるのだろうか。

「この子覚えてる？」

ビシツと指を指した先はテレビ。会社でもないのに105Vとかイカれてやがる。これじゃ、でかすぎて見辛いわ。

良く目をこらして見ると、そこには「世界初！！男がISを動かす！？」との見出しが。

一瞬公に公表されてしまったのではないかと錯覚してしまったが、そこに写っていたのは俺ではなかった。

「織斑……一夏……？」

一夏……織斑。一夏！！全く、俺は記憶力が酷いと思う。実際は咲夜より記憶が引き出せないでいるだけだが。

「一夏ってあの一夏だろ！？なんでIS学園なんかに？」

それには姉貴が悪戯っぽい微笑みで答える。

「あつてからのお楽しみみて奴じゃない。」

三日後、無事入学式を終えた俺達は教室に移動し、担任と各々の自

己紹介へと移った。

一夏の席は一番後ろで俺はその一列右の一番後ろだ。

そして、一夏の左三つに世界を騒がせた篠ノ之束の妹、箒がそっぽを向いていた。

「君！……斑君！織斑君！」

副担任の山田麻耶が何度も一夏に呼び掛けていた。何か考え事でもしていたらしい。そんなことよりこの服凄いやだ。朝起きたら姉貴が笑顔で「楓ちゃん！今日どっちきてく？ああでも、楓ちゃんならこっちのほうが似合うんじゃないかな？」

俺が眠い目擦って見ると、姉貴が男子用と女子用の制服を持っていった。いや、悩まねえけど。誰が好き好んで女子の制服着るかよ。この制服センス無さすぎじゃね？なにこの全面白って。ってか俺は二ユースにならんのか？俺も男のはずなんだけどな。

「不知火さん！！」

「っ！？はいつ！？」

くそっ、声裏返っちゃまった。しかし周りで笑いは起きず、何故か目をキラキラさせていた。こっちみんな。

「自己紹介してもらえますね？」

おい教師、もつと自信持てよ。

「……不知火楓です、宜しく。」

ガタンっとドアが開かれる音がした。何処か遠くで銅鑼の音が鳴っている気がするがよくわからない。

「山田先生任せてしまってますみません。いいか諸君私が担任の織斑千冬だ。これから諸君を一年で使い物にしなければならぬ。いいなら返事をしろ。良くなくても返事をしろ。」

「……はいつ！！」「」「」

「あと、一ついい忘れていたが……」

ここで千冬さんが話を切り出す。何か思い出したようだ。

「不知火は男だからな。見た目に騙されるんじゃないぞ？」
「は？何面倒事を進んで起こそうとすんの？この辺はあれだな、やっぱり姉弟なんだな。シチューの出しにしてやろうかいっそ。」
「クラスからの千冬さんが登場したときよりも沢山の黄色い喚声。もはや阿鼻叫喚の図である。」

「わかったわかった！！わかったから落ち着いてくれ！」
「大声と諸手を上げて場を制する。」

「でも、テレビじゃ織斑君の事しか報道されてなかったよ？」
「とても悔しいけど、それはこの見た目じゃねえかな？」

「ということは世界で二人の男のIS操縦者がうちのクラスに！？」
「しめしめ、どんな稼ぎ方をしてやるうか。」

自分で言っていて泣きたくなくなってきた。納得とでも言うように周りは冷静に頷いていた。あと最後の奴、爆発しろ。

「じゃあ、しょうがないね！」
【しょうがないね！】

「お前はバカにしてるだろ・・・。」
【なんなら普段は私が出てようかしら？】

「お前なら問題しか起きないに100ペリカ。」
【あら残念】

そんなこんなで休み時間を迎えたが完全にお手上げ侍だった。自分の回りには埋め尽くすほどの女子。一夏にアイコンタクトを送ってみる。ファック！！あの野郎苦笑いで手振ってきやがった。それが3年振りに会う奴の態度かよ！！

「ねえ不知火さん！ホントに女の子じゃないの！？」
「証拠見せてよ証拠！」

「見せるるかよ！」
「不知火スペック高過ぎだよー！ずるい！」

「今年はおりxしらで、きまりね！」
最後のやつはもう死んじやえよ。俺だって好きでこんな体を望んだ訳じゃないさ。俺を造った奴の趣味だろどうせ。

と、一瞬だけ見えた女子の隙間。俺は持ち前の動体視力と運動神経で潜り抜けた。小さいっていつのはこういうときには便利だと実感できる。

「きゃ！風！？つてあれっ！？不知火さんがいない！？」

俺は一夏と、箒の腕を掴むとそのまま屋上まで駆け出した。

「一夏！篠ノ之！お前ら借りるぜ！」

「なんだよ不知火のわあああああ！！！」

「な！何をするうわあああああ！！！」

それは他人から見れば目にも止まらぬスピードだった。

あっという間に屋上に飛び出した俺達は呼吸を整えながら（実際には一夏と箒が）お互いの再開を喜んだ。

「にしても、久しぶりだな。一夏も箒も。元気にしてたみたいだし。」

「箒とは6年、楓とは3年振りにぐらいか？」

「そうだな。ところで一夏、お前また背のびたんじゃないか？」

「おっ、よくわかったな。実はな・・・。」

手摺に座っている俺と手をかけている一夏、そして先ほどからずっとしかめっ面のままな箒。

最後にこの面子で居たのは篠ノ之が引越す6年前だった。実に懐かしい。

「こら箒ちゃん！何時まで膨れっ面してるの。いい加減素直に喜びなさいよ。」

「おお、咲夜も元気にしてたか？」

「ええ、お久しぶりね一夏君。」

箒は髪の色と口調ががらりと変わった楓に、驚いていた。そこにいるのは自分の大事な友人、楓だ。けど違う。楓は一夏のことを君付けでなんて呼ぶことは無かった。

自分が呆けた顔をしているのに気付いた咲夜は「おっと」と言いながらこちらに歩み寄る。

「ごめんなさい箒ちゃん。自己紹介がまだだったわね？あたしはこ

の体の第二人格、不知火咲夜。あなたのことはずっと前から知ってるつもりよ？これからよろしくね。」

とても、綺麗な人だ。同性の自分でさえその笑顔にドキツとしてしまった。ん？同性？まあいいさ。

箒は咲夜と一夏が楽しそうに話しているのを見て、焦りを感じた。

「あ、そうだ箒。この前大会優勝したんだよな。すごいじゃないか！」

「な！な、何故知っている！？」

「何故つて、新聞でだけど。」

「何故新聞なんか読んでいるんだ！？」

「これはまあなんという無茶振りね。」

思わず突き放すような言い方になってしまったが別に一夏が嫌いなのではない。むしろ逆、好奇心を超えたもやもやが箒を覆っていた。6年振りに会う親友は以前の様な餓鬼ではなく一男性としての品格を持っていたのだ。また自分心と体も成長していた。

つまり、一夏を異性として意識し始めていたのである。箒本人はモヤモヤの存在までしか判明していないがこれが取れたら。

「お、お前達こそどうなのだ？まだ剣の道を歩んでいるのではないのか？」

「帰宅部皆勤賞です。」

「わりと別件で動いてました。」

「咲夜、別件て？」

「ここからは楓に代わりましょう。」

桃色のロングだった髪はみるみる内に黒のセミロングへと短く変わり閉じた瞳が開かれた時には人格は楓に代わっていた。

「まあなんだその、簡単に言えば特訓だな。」

「どんな内容なのだ？無論貴様のことだ。生ぬるい訓練等では済まないのだろう？」

「姉貴と実戦形式での訓練だ。一番きついのはISを使ってくる辺りだな。一体何本の手足が飛んでったことやら……。」
二人は言葉を無くした。それもそうだ。こいつらは普通の人間だ。あんな無茶苦茶な訓練をするのはどこを探しても俺ぐらいしかないと思う。

訓練の相手はISに乗った、初代ブリュンヒルデという世界王者すらも超える化物。そしてこの訓練のルールは簡単。何を使っても構わないからISを強制解除させること。俺の武器は素手しかなかったが、姉貴が自身のIS、*TR-1*通称ヘイズルのシールドブースターを貸してくれた。シールドブースターは名前の通り、シールドにブースターがついたものだ。だが、あくまでもブースターなだけであり銃器や刃物は装備されていない。

「大丈夫 楓ちゃんならきつと私を超えられるわ。近いうちにね。」
「なんだよ、その意味深な発言は。先にいつとくがフラグは回収するつもりはないぜ。」

ISというほとんど未来兵器である存在に生身で立ち向かうとかどんなシチュエーションだよ。俺生きてるといいな。

「その点も楓ちゃんなら大丈夫よ。なぜなら多少千切れてもすぐ直るわ。」

えっ。いくら人造人間とはいえど、そのレベルまで行くと人間のラインも踏めないきがするんだけど。

【そのくらいであわてないでよ、多分これからもっとひどいことになるから。】

「じゃあ、始めるわね。」

「……ったく、楽に死ねないならとことんやってやるよ!」

「じゃあまず一回。」

俺が発言した直後、消えた姉貴は俺の目の前に立っていた。油断しすぎた。

「痛ッ!?!?」

姉貴の手に持っていたものは一本の銃剣。その切っ先は俺の腹をど

真ん中に貫いていた。

いやいや、いくら楽に死ねないからって人間なら即死もの一発を仮にも弟の俺にかます普通？ああすまん普通じゃなかったなこいつ。「油断大敵ね、もつと殺気をまき散らしていた頃の楓ちゃんなら避けるどころかこのブレードを折ることぐらい可能だったはず。」

……。確かに以前の俺は自分が普通の人間と同じ世界に入れない存在と知ってしまった当時は周りのすべてに言葉にできない思いをぶつけてたな。

「興ざめね。あなたにはまだ早かったみたいね。さ、お風呂に……」

ISをまとった姉貴は人格が混ざる。簡単に言えば、東さんみたいな適当さと千冬さんみたいな厳格さを併せ持ったような人格に代わる。まあ、だからなんだという話ではあるけれど。

「うつせーな少し黙ってるよ。」

右手でブレードをつかむと一気に引き抜く。血があふれ出るが割と痛みを感じない。ちょっと怖いけどな。案外行けるもんだと感じると咲夜に言う。

「咲夜みてえには動けねえけど、暴れるくらいならやってみてもいいよな？」

【はあ、後片付けにつき合わされんのはこつちだからそこんとこ考えてね？】

咲夜の了解は得た。後は、勢いに任せるだけ。

そつからの俺は巻き返しを図った。

何度も体に突き刺さる感覚と戦いながらも、いやおもくそ刺さってたけど。あと何回も両腕が体から離れていったけど、なんとか姉貴の動きが見えるようになってきた。

「流石楓ちゃん！この一時間で

こんなに動きが良くなるなんて。持つべきは最愛の弟かしら？」

最愛とか言っておきながらたまにブレードだけじゃ飽き足らず銃もぶっぱなしてきやがる。ビームとか喰らったら死んじゃうはずだか

ら！

「はっ！勝手に言ってる！！」

直進してくると思っただらスライドターンでこちらの攻撃をずらし、
できた隙について瞬間加速で猛烈な突きを放つ。おい全力過ぎんだ
る。

しかし何回も体で感じた俺にとってはもう怖くない。攻撃を躲され
たときに流れる空気を感じればいいのだ。いくらISと言えど質量
を持った実体である。抵抗というものは存在するはずだ。

「そこだあ！！」

俺が感じた上から見て右斜め下に向かうため片方の足を地面から離
し、もう片方を軸にする。

「なっ、アブソリユート・ターン！？」

なんだか知らないが姉貴が驚く事らしい。

「衝撃のおおおお！！！！」

幸いにもシールドブラスターは手動でも機能するようだ。グリップ
を力強く握り、吹き飛びそうな体を足だけで押さえる。

回避の為に開いた距離を全力で縮める。外した後のことなんか考え
る必要なんかない。

「ファーストブリットオオオオオ！！！！！！」

その体は弾丸の如く。その右腕は全てを殴り壊す。

「つくあ！？」

ISを纏っているのにも関わらずかなりの距離を吹き飛ばされた。
なんとということだ、ISにはシールドエネルギーというものが存在
し体を保護する機能が備わっている。それでこの威力と考えると、
喰らっていいのは後一発。シールドエネルギーの発動範囲は意外に
広い。今までのかすっていた分も含め、シールドエネルギーはもう
底をつく一歩手前だった。現役時代の千冬にさえ全力の半分もだし

ていないと言うのにこのざまはなんだ。急速に成長している弟に押されている。

「あらら、ぬるま湯に浸かりすぎたかしら？」

「いまさら後悔したっておせーよ！！撃滅のおおおー！！セカンドブリッドー！！！」

今度は横回転に重点をおいた攻撃。シールドブースターをあんな風にご利用したことはなかった。

「でもねっ！！あたしは貴方の姉なのよ？そう簡単に墜ちてたまるもんですか！！」

相手が二歩先を読むのなら、こっちは三歩先を行けばいい。実に単純明快である。

残りのエネルギーを搾り出し、勝負にかける。

「なっ！？かわされた！？」

かわされたと思ったら目の前から消えた。

【楓！！上よ！】

「これで勝負をつけるわ！」

「いいぜ、かかってこいよ！！真ん前から撃ち碎いてやるぜ！！！」

紅葉は瞬間加速で真上に飛び、もう一度加速して右腕に握ったままのブレードをつきだす。

同じように楓は瞬間加速こそ無いが、シールドブースターによって同じような推進力をえている。

「抹殺のおおおー！！ラアアアストブリットオオオー！！！」

右腕の先に作ったその拳を真上に突き上げ、敵を迎え撃つのではなく自らぶつかりに行く。

「とまあ、こんなかんじのことがあった訳でして。」

「無駄に熱いのはその切り方はどうかとおもっぞ？うん。」

「そ、それではしかたないな。で、では私は弛んでいる一夏を鍛え直さなければなるまいな！」

「な！？なんでそうなるんだよ！」

「う、うるさい！楓は私の預かり知らぬ所でも修行していたというのにお前と言う奴は・・・。」

こんなかんじで一夏の特訓が始まらないとか。

と、タイミングよくチャイムが鳴った。もう教室に戻らなくてはならない。

教室へ戻り、二時間ほど授業が、すぎた。

お昼になったので三人で食堂へ向かう。

「しかし、とんでもねえなこの学園。」

「ああ、たしかにそう思う。なんたって・・・。」

「伊達に操縦者の教育機関をやっているわけではなかつた。」

「購買にタマゴハムサンドが置いてあるんだぜ！！こりゃ買い占めるしかないだろ！」

どこかでずっこける音が聞こえたような。いや、気のせいだろう。とにかく今は目の前に鎮座しているタマゴハムサンドを確保しなければならぬ。なんとしてでもだ。

「昔から好きだよな楓。」

「当たり前だのクラッカー。世の中にこれを超える食べ物も存在しないし存在してはならないからな。」

「だからといってダース買ひしようとするのはどうかとおもっぞ？ っていうかしちゃダメだろ！」

そこには片手で3ダースほどひょいと持ち上げた楓がいた。一夏は慌ててそれを制すると代わりとってはなんだがやきそばぱんを楓におごつてあげた。

「まあ、他のパンが、食べれないわけじゃないからいいけど。とりあえずありがとう。」

「初日から微妙に痛い出費だな．．．続くような事があつたら俺は破滅だああ！」

いまいち話が噛み合っていない気がする。

「貴様らしい加減にしろ！ 煩くて飯が食えん！」

シーン．．．

空気が凍るのがよくわかる。箸はやってしまったというような顔を一瞬で戻し、相変わらずの膨れっ面で食堂を後にしてしまった。

「何怒つてんだ箸の奴？」

「さあな？」

このころから一夏の鈍感認定が決まった。らしい。

クラスメイトに男子は二人（前書き）

書き方を大分変更してみました。なんか長くなりました。明後日からテストです。

クラスメイトに男子は二人

side 織斑一夏

・・・これは・・・これは想像以上にきつい・・・

「えーと、一年一組副担任の山田真耶です。」

シーン・・・

重い・・・空気が重過ぎる・・・

俺は窓側の席にいる6年ぶりに再会した篠ノ之しののへ之の 箒はたき
にアイコンタクトを送る。

“ 箒、助けてくれ！”

箒から返事が帰ってくる。

“ 死ね！”

ええ！？それが6年振りに再開した幼なじみに言う台詞かよ。

「…君！織斑君！」

教師に呼ばれていることに気付いた。

「あ、はい！」

周りからクスクスという笑い声が洩れてくる。
はあ、ここで過ごすのも結構シビアになりそうだな。

side
楓

朝起きるとセシリアは既に着替えた後だった。
その後朝食に連れて行かされた。

しょくどう！

食堂のおばちゃんに挨拶されたから

「んじゃ、これからよろしくなおばちゃん！」

と返したら「まあまあ、随分と男の子っぽいわね〜。」
なんて言われた。

おい。

落ち着いて食事をとろうとした俺には右も左も分からないのでセシリアを探していた。

「なあ、なんか探してるのか？」

声の方向に振り返る。

男がいた。こいつだ！

俺以外の男のIS操縦者。

「ああ、まあな。金髪ロン毛を探してたんだが生憎見つからなくてな。困ったもんだ、知り合いそいつしかいないんだよ。」

少しばかりわざとらしいがその男は何を思ったのか

「じゃあ俺達と一緒に食べようぜ。」

と誘ってきた。

セシリアを探すのも疲れたのでその誘いに乗ることにした。

「そのお誘い、乗らせてもらうぜ。」

その男についていき、席に向かった。

向かった席にはポニテのロングが座っていた。

「箒、この子も一緒だけいいか？この子の探ししている人が見つからなくてな、とりあえず食ってからにしようと思って。」

箒、と呼ばれたポニテの女子は「一夏誰だその女は！？」と怒鳴った後、一夏の話聞いて何かむくれた様子で肯定した。

「あ…あの…よろしくな、お二人さん。」

2人の空気に割ってはいる事に少々戸惑いながらも自分の席は完璧に確保した。

「俺は織斑一夏。一夏でいいぜ。」

「篠ノ之箒だ。」

一夏は明るく、箒は真逆の態度で接してくれた。

2人に名のられたからなのりかえす。楓は好奇心からくる武士の心得を応用する

「俺は不知火楓。楓とよんでくれたほうが助かる。あ、ちなみに俺男だから。」

楓の一言で空気が凍る。隣のテーブルにいた女子は皿を落としてしまった。

「何ッ！？男でISを動かせるのは一夏だけのはずだが！」

「そんなこと言われても俺だって理解が追いついてないんだよ。」

「でもまあ俺以外に男でISを起動できる奴がいるなんてな。ほったしたぜ？流石に俺一人じゃ肩身が狭いって言うかさ。」

楓の発言に食ってかかる筈だが、一夏の安堵の声により事態が収縮した。

「ごちそうさまー。さて、学校の始まりかあ。あ。楓、悪いけど俺達先に行くな。そのうちまた会おうぜ。」

楓にそう伝えた後、そそくさとどこかへ行ってしまった。

自分も支度をして教室に向かう。

「えーっと一年一組はーっと。あ、ここだ。」

ドアを開けたその先には一夏がこちらをみていた。

「やつほー一夏！また会ったな。」

「おう楓！お前もこのクラスなのか？」

「ああ。ってセシリア！お前どこ行ってたんだよ？飯んとき探したぜ？」

「あら楓さん？この私に声を掛けるなんて随分と偉くなったものですね。」

楓の心配をよそに心なしに傲慢な態度をとるセシリア。

「おい！人が心配した返礼がそれかよ？イギリスってのは礼儀に欠けてるみたいだな。」

挑発に挑発を返すとセシリアが興奮し始める。

一触即発の状態の中、教室の扉が開いた。

「遅れてすみません！ええとこれからHRを始めたいと思います。」
教室に入ってきた教諭の声に反応し、号令がかかる。

誰も話をしない。その空気が一夏には重かった。楓と話そうにも楓の席は窓側の一番後ろの席であるために叶わない願いだっただ。

篤はと言えば、左に2個ほどズレた窓側の席である。
篤に“助けてくれ！”とアイコンタクトを送ったが“死ね！”と返ってきた後、そっぽを向かれてしまった。

はあ、これが六年振りに再開した幼なじみに対する態度か？俺、嫌われてるんじゃない…。

「…君！織斑君！」

副担任に呼ばれていることに気付いて慌てて返事をする。

「あっはい！」

周りから笑い声が聞こえてくる。

「大声だしてごめんなさい。50音順で今おなんだよね。自己紹介してくれるかな？駄目かな？」

「いや、あのーそんなに謝らなくても…。…えーっと織斑一夏です。よろしくお願いします。」

周りから視線が突き刺さる。

駄目だ！ここで喋らなかつたら暗い奴のレッテルを貼られてしまう！

一夏は深呼吸したあと、もう一度息を吸った。

副担任含む周りが目を見張る。

「…以上です！」

あちこちからガシャーンという音が聞こえてくる。

「あれ、駄目でしt!!！」

最後まで言おうとしたら突然の頭痛が襲った。

その一連の流れに楓は思わず笑ってしまった。

「ち、千冬姉！グホオツ!!！」

「織斑。ここでは先生と呼べ。」

「なんで千冬姉がここグヘア！」

「二度も言わせるなよ織斑。」

一度目は拳骨、二度目は机に叩きつけられていた。

「一夏、そんな攻撃で大丈夫か？」

冗談混じりで心配の言葉を掛けるとボロボロになった一夏が返答する。

「大丈夫だ、問題ない。グアア！」

「話を聞いているのか？」

「はい、すみません。織斑先生。」

メガンテを食らいながらも意識を飛ばさずに口を開く一夏。

「きゃあああ！！あの織斑先生よ！！！」

女子達が織斑教諭をみるやいなや、興奮し始めた。

「全く、毎年よくもこんなに馬鹿が集まるもんだ、まあいい。」

織斑教諭は心底呆れている様子だった。

「諸君！私が担任の織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物にするのが私の役目だ。」

一呼吸置いて、話を続ける。

「いいか！これから基礎知識を半年で覚えてもらう。その後実習だが動作は半月で覚えろ。いろいろな返事をしろ。よくなくても返事をしろ。」

「……はいつ！」「」

「皆さんも知っているようにISの正式名称は“インフィニット・ストラトス。日本で開発されたマルチフォームスーツです。10年前に開発された……このIS学園は世界で唯一IS操縦者を育成する養成学校です。様々な国々から色んな人がISの操縦者になるために勉強しています。」

「では、三年間しっかり勉強しましょうね。」

「「はい!」「」

休み時間

「あの子よ!世界で唯一ISを動かせる男性って!」

「試験でうごかしちゃったんだって!」

「やっぱり入ってきたんだ。」

一夏に好奇の視線が集中してるため楓は気楽に動くことができた。

「流石に一夏を放っておくのは野暮ってもんだよな。おい、一夏!。ちよっといいか? 篤さんもどう。」

「…いいだろう。」

屋上

「で、話ってなんだよ。」

「何故私まで。」

一夏は不思議そうに聞いてくる。

箒は専ら不満そうだった。

「いんや、何もねえよ？だって一夏肩身の狭い思いしてるだろうなって顔してたから。ほら同じ男同士だからな。」

「そっか、ありがとな。にしてもなんでお前には注目が集まらないんだ？」

ふと投げかけた疑問に対し箒が答えた。

「それはこやつの形の問題ではないか？」

箒が曖昧な答え方をするので楓は頭をかきながら恥ずかしそうに口を開く。

「いや、なんというかね。俺はほんとに男なただけどな……。胸がな……。」

若干顔を赤くして話す楓に疑問を持ちながらも詳しく聞こうとする一夏。

「ん？胸がどうしたんだ楓。」

楓の様子を伺うように顔を覗き込む。

その状況に箒は焦りを感じていた。

休み時間の終わりを告げるチャイムが鳴る。

屋上の扉の後ろで残念そうに溜め息をつく3人がいた。

「あの子達誰？一人は男子の制服着てるけどどうみても女の子だね。一夏君の何なんだろう？」

「反応3。シグナルロスト。」

【ADA、警戒しなくとも大丈夫よ。流石にこの学園で命を狙うだなんて愚策だわ。】

どうせ好奇心から来るもんだろ。ほっとこうぜ。

「了解」

「チャイムなっちまったな。楓、第教室に戻るか」

今は山田先生の授業が行われている。

楓は退屈を感じていたが内容が内容の為に、疎かにすることが出来なかった。

「…。じゃあここまでで何かありますか？」

最初の内は楓も頭を抱えていたが咲夜とADAにわかりやすい説明をして貰っていたため、なんとか食らいつく事ができた。

だが一夏はダメだった。その様子からはツボにはまっているようだった。

「織斑君何かありますか？なんでも聞いてくださいね。何せ私は先生ですから。」

一夏が重い口を開いた。

「先生。」

一夏が手を挙げて呼ぶと笑顔で接してくれた山田先生。

「先生、殆ど全部分かりません！」

皆が芸人顔負けのズサーの体現をしてしまった。何故かと言われれば本来、入学前の“必読”と書かれた参考書を見ているはずなのに一夏のこの結果だからであった。

教室の端にいた千冬が歩み寄る。

「織斑、入学前の参考書は読んだか？」

一夏は下を向く。どうやら自分の記憶を漁っているようだった。

「多分：間違えて捨てたら頭に鈍痛が！！」

一夏が理由を話している途中で千冬の名簿ハンマーが炸裂した。

「後で再発行してやる。一週間で覚える。」

「え、一週間は…。」

「やれといっている。」

否定の態度を示そうとした一夏だが千冬の鋭い眼光がそれを許さなかった。

「…はい、わかりました。…」

休み時間

楓はシャープペンを弄って気を紛らわそうとしている一夏の所に行き話し掛ける。

「おーい一夏、さっきの時間大変だったな。お前と織斑教諭のやり取り見てたら笑いそうだったぞ。」

腹筋をさすりながら言う楓。そんな楓をジト目で睨む一夏。2人が話していると後ろに誰かが立っている事に気がついた。

「ちよつとよろしくて?」

「んあ?」

「なんだセシリアか。でな一夏、この所がこうで…。」

「なるほどなー。」

「何ですのその態度！この私に話しかけられるだけでも光栄なのですから。って無視しないでくださるかしら！！」

「悪いな。楓は知り合いみたいだけど俺君のこと知らないし、第一今勉強中だし。」

「なんですって！？このイギリス代表候補にして入試主席のセシリア・オルコットをご存知ないのですの？」

一夏が無知なのは無理も無いのに対して憤慨しているセシリア。バロンツと机を叩くぐらいにまで興奮している。

「おいセシリア、一夏が知らないのは無理もない話しだろ。」

ふと一夏が手を挙げる。

「質問いいか？」

「下々の問いに答えるのも貴族の務め。宜しくてよ。」

「…代表候補生ってなに？」

本日3度目のずっこけが教室に起こった。

先日まで同じ境遇にあった楓は気を取り直して説明する。

「代表候補生ってのはな一夏、その国が代表するIS操縦者の候補

生として選ばれる、所謂エリートってやつらしい。」

説明の途中でセシリアと交代する。

「単語から想像できる話でしょうに。つまり、そのエリートである私と同じクラスになれるだけでも幸運なのですよ！」

そういった後黒板の当たりを歩き始めた。

「まあエリートなわたしでも泣いて頼まれれば教えて差し上げないこともないですが。何せ入試で唯一教官を倒したものですから。」

周りがひそひそと話し始める。

「あれ、教官なら俺も倒したぞ。」

「奇遇だな俺もだ。ってかあれ試験にする難易度か？」

周りが騒然とする。試験で教官を倒したものが男女含め3人もいるのだ。当人であるセシリアも開いた口が塞がらない様子。

「言っちゃえば、“女子では”って話だろ？」

セシリアが罵詈雑言を並べようとした際にちょうどよくチャイムが鳴った。

「ふんっ！この続きはまた今度ですわ。」

「えっ、続くの？」

放課後

楓は一夏と一緒に量に戻る途中だった。だが、二人とも会話をしていない。むしろできなかつたといったほうが正しい。

「なんか……いついな……。」

「あ、ああ……。」

後ろをちら見するとそこには。

大勢の女子が談話している。

「これからこれが普通ってなると、先が思いやられるな。ま、お互いがんばろうぜ。」

「そうだな。じゃあ楓、俺こっちらしいから。」

部屋にもどった楓は、荷物をほっぽり投げてベッドに突っ込む。

「メンタルレベルの低下を確認。今日はもう休んだほうがいいですよ。」

【お疲れのようね。】

「まあな。全く、いつの時代も授業はとんでもねえな。」

【そういわないの。私とADAで教えてあげてるじゃない。】

「それには感謝してるよ。さて、ねるか。」

「それはまだ早いと思われますのよ。」

いつ帰ってきたかはわからないがセシリアが口を挟んできた。

「で、なんでだよ。俺はもう疲れたんだ。」

「日本の男性は根性がないようすわね。」

セシリアは挑発をしてくるが楓は特に意に介さないようなくさを
する。

「おいおい、ルームメイトなんだ。仲良くしようぜ?」

「いいえ、今からでも遅くありませんわ。部屋を交換していただ
け
ばいいんですもの。」

「なんだ、できるんなら最初からそうしてくれよ。」

「いいですが、その前に。」

ここで区切ったセシリア。布団にもぐっていた楓は気になったため

に布団から顔をだした。

「明日の放課後、決闘を申し込みますの。もちろん、やるからには全力を出しますわ。」

「咲夜、どう思っ？やってみるか。」

【専用機持ちつてのがネックだけど、何とかなるんじゃないかしら？】

「OK、決まりだ。その決闘受けてたつぜ。」

「まあ、専用機持ちであるこの私に勝てるとはあまり思えませんわ。」

セシリアの挑発をスルーして布団にもぐりなおした。

次の日。

朝から織斑教諭の声が響く。

「これより、再来週行われるクラス対抗戦におけるクラス代表を決める。クラス代表は対抗戦だけでなく、生徒会の出席や委員会への出席など。クラス長見たいなもんだ。自薦他薦は問わない。誰かいないか？」

楓が睨みを利かせながら牽制する。

「イギリスだって大したお国自慢ないだろ。糞不味い料理で何年馳せたか。」

怒りのあまりに周りが見えていないのか、机をばんばん叩きつけながら弁解をする。

「イギリスにも美味しい料理はございますの！祖国を侮辱するつもりですか！」

「簡単な話、そんだけの国って事だろ？」

「…決闘よ決闘！決闘を申し込みますわ。わざと負けたら奴隷にして差し上げますの。」

「上等じゃねえか。四の五の言うより分かり易い。」

「ハンデはどの位つければいい？」

上から順にセシリア、楓、一夏である。

一夏のハンデ発言で周りからは笑いが起こった。

「楓ちゃん、織斑君。それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのってESが出来る前の話だよ？」

「もし本気で男と女が戦争したら3日持たないって言われてるぐらいだよ？」

散々な言われ方をされて一夏は軽く傷ついたが楓は寧ろワクワクしているといった具合だ。楓の想像は概ね“俺というイレギュラーがはいったらどうなるんだろうな”と考えているがそれは楓以外知る由は無かった。

「むしろ私がハンデをつけなくていいのか迷うくらいですわ。」

今の発言で楓の堪忍袋の緒が切れた。

「炭にされてえかおい。お望みなら……一夏。」
楓に手を出してそれを制した。

「いや、ハンデは要らない。」

「ああ、俺もいらねえ。」

「えゝそれは舐めすぎだよ。」

近くの女子が一夏を説得しようとするが一夏はこれを拒否する。

教卓の前で腕を組んでいた織斑教諭が口を開く。

「話はまとまったみたいだな。でわ決着は次の月曜、第三アリーナで行う。オルコット、織斑、不知火は準備をしておけ。」

クラスメイトに男子は二人（後書き）

楓と咲夜でIS分けようかなと悩んでいます。

どちらにしても出すISは「0」の予定です。出さないって意味じゃないです。はい。

0の鼓動と集大成

放課後早速その日から特訓を始めた。

が、ここで思わぬ事態が発生してしまった。

「ISが反応しない…だと…!？」

楓はこの事態に少し驚いている。試しに咲夜と交代する。

「あら、動くじゃない。楓は何をしているの？」

【えっなんで動くの?】

「DELPHI、この馬鹿に10文字以内で教えて挙げて。」

「咲夜は女です。」

なる程、だから咲夜にしか起動出来ないのか。

そんなこんなで話しているとアリーナに専用機を装備した一夏と訓練用ISを装備した筈が入ってきた。

一夏はこちらに気がついたみたいで近寄ってくる。

「おーい楓! ってあれ? その髪どうしたんだよ。」

一夏は咲夜の存在を知らない為にこの様である。咲夜は溜め息混じりで一夏に説明する。

「初めまして」、織斑一夏君。あたしは楓じゃなくて咲夜。よろ

しくね。」

ウィンク付きで自己紹介すると何故か一夏は顔を赤くした。しかし直ぐに我に返って説明を求める。

「つまり…どういうことだってばよ…。」

「貴様が楓でないなら楓はどこにいるのだ？」

「頭を抱えたくになりますね、頭ないですが。」

【DELPHIお前、なかなかエグいな。】

「お誉めの言葉として受け取ります。」

二人の会話に呆れている咲夜は単刀直入に物を話す。

「つまり、二重人格なわけ。楓が第一人格、あたしが第二。でもってISを動かせるのはあたしだったの。」

「ただでさえ男女の区別がつかないのに女の人格とは…。」

「ボーダーブレイクもいとこだな。」

二人は勝手にうんうん頷いている。

「今更そんなことはいいいから、ちよつと模擬戦してみない？」

一夏の力量を確認してみたかったのでちよつとしたお誘いをだした。

一夏は案外躊躇う様子も無くそれを肯定した。

「じゃあ決まりね。筈、審判お願いね。」

咲夜と一夏が定位置につき、筈が開始の合図をする。

先ず最初に動いたのは一夏だ。

「うおおおおおー!!」

ファーストフェイズが終わっていないとは言え、専用機で有ることには変わりはない。凄まじい速さで咲夜に向かった。

一夏のISである白式の唯一の武装である“雪片式型”を容赦なく向ける。雪片で咲夜を捉える瞬間、咲夜の姿が消えた。

「どこをみているの？」

雪片の一振りを外したおかげで好きが出来てしまい、そこを狙われる。

「グアアッ!!」

「一夏!!」

咲夜の綺麗なアップーが入る。

《ダメージ62、損傷軽微。危険度C。》

「大丈夫だ筈。咲夜、お前強いなあ。…よし！」

気合いを入れ直した一夏は再び一直線に突っ込む。

「同じ行動を取るって事は何か策が有りそうね。DELPHI、仮想シュミレートから割り出される行動パターンを右下に表示して。て。」

「了解。…シュミレートの結果を表示します。」

咲夜はDELPHIが表示した画面を見る。そこには瞬間加速の文字が。イグニッション・ブースト

咲夜は瞬間加速がどういうものなのかは知識でしか知らないので警戒を怠らない。

一夏が目の前に迫ってきた。

先ほどと同じように雪片を振るう一夏。

咲夜は同じような行動は取らずに一夏の上を飛び越えてカウンターを出そうとしたら既に後ろを取られてしまっていた。この状態で戦うのは明らかに不利すぎる。

「もう降参するか？」

「嫌よツと！」

雪片を背中に突きつけられた程度じゃ諦めない咲夜。一夏の意見に反対を示すと同時に振り向き、訓練用のブレードで一夏を押し返す。

「そつちがその気なら！はああああ！！」

白式は装備の都合上近接格闘に特化したISである。しかし咲夜は近接格闘のレベルが桁外れなのだ。

一夏の連続攻撃を掠ることなく避ける。それはまるでダンスのようだった。

審判をしていた箒は思わず口に漏らしていた。

「訓練用ISであの機動性…どうなっているんだ…。」

ギャラリーでみていた千冬や他の生徒達も啞然としていた。

「…不知火楓。奴は本当に人間か？…。」

「楓ちゃんかつこいいよ！」

楓というワードに少し反応した咲夜。ギャラリーには自分のクラスの生徒がほんのすこし混じっていた。

「あたしは楓じゃないわ！咲夜って呼んでね！」

ギャラリーに向かってそういうと、ギャラリーの皆さんは興奮しているのか顔を赤らめて応援してくれた。

「そろそろ終わらせましょうか。」

ほぼ無傷の咲夜の目の前には大きな傷は無いが確実にエネルギーが

なくなっている一夏の姿があった。

「はあっはあっ…訓練用のISも馬鹿にできないな…。」

一夏は力を振り絞って身構えた。が、既に咲夜の姿は地上にあった。

その光景をみて思わずずっとこけた一夏だが、急いで咲夜の後を追った。

因みに箒はほぼ空気と化していたが、「…一夏の馬鹿…私を置いていきおってからに…。」と独り言をばやいていた。

それから数日後のこと。

咲夜は誰もいないアリーナで楓の代わりにISの特性を体感していた。

「調子はどうだい、ボーダーブレイカーさん？」

咲夜は声が聞こえてきた方向を見る。

「なんの用？ってか誰。」

【ぶふっ！！ウウウウサウウウ耳ウウウ】

「黙りましょう。」

【…はいさーせん。】

「人に訪ねる時はまず自分からって習わなかったかい？」

声の主の特長は…ウサ耳だった。

楓は我慢していないが咲夜はこらえて、話を続ける。

「はあ、あたしは咲夜。あなたは？」

「篠ノ之束だ。さて本題に入るが、君と一夏の模擬戦を見させてもらったよ。素直に君の動きは凄かった。いくらISに慣れてないとしても相手は専用機だった。それを訓練機でしかもほぼ無傷とは恐れいったよ。」

「本題に入る、まで読んだわ。」

簡単に長すぎて聞いていなかっただけの事である。

「わかった。端的に説明するよ。君達の専用機を持ってきた。」

【えっ。】

「それは有り難いけどどうして？」

「君が使った訓練用ISだが、運動性能を確認した教師達が入っていた。「ISのコアにヒビが入っている」と。」

ISの中枢であるコアにヒビが入るとするのは本来有り得ない話である。

それが一夏との模擬戦で起こってしまった。それだけ機体にかかった負担が大きかったのである。

咲夜にISを使わせる度にISが壊れるとなるとたまったものではないため、束と関係を持っていく千冬が連絡を寄越した、ということらしい。

「これが君達のISだ。白い方は咲夜君なので、アンクレットの方は男の人格でも使えるようになってる。」

ヒョイと投げられた二つは白いアンクレットとブレスレットだった。

「場所が場所だし、せっかくだから展開してみる。」

咲夜は束から受け取った白いアンクレットを展開する。

「…凄いわね。」

その姿は野生の獣を具現化したような形だった。

黒ベースに白い装甲がついていて、腕にはオレンジ色の太くて鋭い爪がついていた。

画面に文字が表示されている。

チエンジンググアーマーシステム

「CAS?」

「CASはその名の通り、アーマーを換装するものです。このISはCASにより機体そのもののコンセプトを変える事ができます。」

DELPHIにCASについて説明してもらったあとに画面を見直す
すと下の方に

イエーガー

シュナイダー

パンツァー

の文字が並んでいた。

「DELPHI!ISCインストレーションシステムコールイエーガー!!

「standby JAGER ready」

咲夜が叫ぶと全身のパーツが吹き飛び、ネイビーカラーのパーツが
それぞれの部分に換装される。

頭にはウサ耳みたいなのが付き、背中には大型イオンブースター。

全体的に装甲が薄くなり、その分が機動性に回る。

換装後、試験運転をしてみると白式以上のスピードと運動性がある
のを実感した。

「なによこれ、スピードが桁外れ過ぎてるわね。こんな気遣いじみ
てる代物、とても現行の世代を逸脱してるわ。」

今の世代でこの性能はおかしいと突っ込む咲夜。
その意見に応えるように東が言う。

「そりゃあまあ過去の遺産だからな。…今よりずっと前に造られていたものがこんな時代を無視したオーバーテクノロジーだとはな。」

「なるほどね…ってあんたが造ったんじゃないんだ。まあいいものをありがと。大事にするわ。…楓、いいわよ。」

咲夜は東に礼を言った後楓と交代した。

「正直うずうずしてましたごめんなさい。出る、ウィンドウォート
！！」

楓が展開したISは全身が白い装甲に覆われていた

装備は頭部バルカン砲、両腕に持っているコンポジットシールドブ
ースター、ブーストバルカンポッド。

見た目はだいぶ華奢な体つきではある。

「ADA、ウィンドウォートのワンオフアビリティーはどうなっ
ているんだ？」

「ありません。ですが東博士の作った装備と互換性があります。」

「他の装備？追加オプション的な感じか。」

「はい、ウィンドウォートは東博士が極秘裏で開発されていた次世

代型ISです。そのため今までのISの部品との互換性が存在します。」

楓はADAが話す情報に目を見開いた。

「そんな機能、第三世代とかそういう話じゃないな。最低でも第六世代ぐらいのスペックだろ…。」

楓が感嘆の声を漏らす。すると束が誇らしげに話す。

「ウィンドウオートは私が極秘裏で開発してきた六番目、つまり今までのTRシリーズの後継機だ。今までのそれとは異なり一から新規設計しなおした。バススロットの異常な空き具合のおかげで重裝備型ISの5倍ぐらいの物資を詰められるんだよ。」

あまりのスペックに軽く血の気が引いてきた。

束の話を聞いているとだんだん頭が痛くなってきたので退却する。

「なんだ、もう帰るのか。…一っだけ言うておく。」

急に束の雰囲気が変わったので思わず振り向く。

「なんだ？」

「力の使い方を誤るなよ？」

「俺を誰だと思ってやがる。」

楓はアリーナを後にした。

当日

戦う順番として、最初に楓とセシリア、次に咲夜と一夏というふうになった。

「織斑君頑張つて〜！」

「楓ちゃんかわいい〜！」

「咲夜様素敵〜！」

などなど観客席からの声が多数寄せられている。

当の本人達は困っていたり、暴言を吐いたり、手を振り替えしたり。

マイク越しに千冬の声が飛んでくる。

「時間は限られている。さっさと始める。」

最初は楓とセシリア。

既にセシリアは蒼いフルーティアーズ雲を展開し、高高度から楓を見ていた。

「誰かと思えば楓さんではありませんか。∴そうですね、チャンス差し上げましょう。私が一方的な勝利を得るのは自明の理。今ここで謝るといふのなら許してあげないこともなくってよ？」

まだTR-6を展開していない楓が口を開く。

「そういうのはチャンスとは言わないな。知ってるか？」

楓がTR-6を展開しながら言う。

「死亡フラグって言うんだぜ？」

「楓ちゃんて専用機持ちだったの!？」

突然の出来事に周囲はざわついている。

対してセシリアは交渉決裂とでも言うかのように

「なら、さよならですわ!」

トリガーを引いた。

〔前方エネルギー反応増大。〕

「あいよ!」

そのビームを合図に飛び上がる。そのままシールドブースターをセシリアに放つ。

ダメージ158、損傷大、危険度A

「ッ!!なんですのそのでたらめな威力と正確さは!？」

「どうした!!てめえの全力を早く見せるよ!じゃねえと日が暮れちまったる!」

セシリアは楓の挑発にのり、ブルーティアーズを散開させる。

ブルーティアーズで遠隔攻撃を行いながら、自身もひたすらに楓を狙い撃つ。

だが、射撃のスピードよりもずっと楓のTR-6の方が速いため掠ることすらなかった。

「機動性も今までの世代ではありえませんか！なんなんですかそのISは！！」

怒りながらティアーズを乱れ打ちしていたセシリアはいきなりのhitの画面が出てきたことに驚いた。

「鬼ごっこは飽きたのですが。そろそろワルツもフィナーレを迎える頃ですわ。」

「そうだな…。咲夜が一夏と戦いたいってうるさいからな。」

【ちよっ。そんなこと言っていないわよ！唯ちよっと決着つけたいだけよ。】

「変わりありません。」

全方位からロックオンアラートが鳴る。

「囲まれました。敵、射撃体制です。」

「しつてらあ！！！！」

楓は叫びながらシールドブースターの向きを逆にした。するとシールドブースターの変形し、手の形になる。それを肩に装備する。

「ギガンティックアーム！！エフィールドオン！」

ギガンティックアームから発生したエフィールドによりブルーティーズのビームが無効化された。

ウィンドウォートの規格外の性能に口を閉じるのを忘れてしまいそうになるが、それ以上に千冬は楓に対してこれまでに感じたことのない畏怖の念すら覚えた。

「あのISもそうだが操縦者である楓は一体何者なんだ…。」

右腕のアームをシールドブースターに戻す。

楓は射出した左のギガンティックアームでセシリアを掴み、さつき戻した右のシールドブースターで狙い撃つ。

「決め台詞は？」

「【Jack pot】」

「えーと、勝者は不知火楓です！」

山田先生の司会が入り、みんなが我に返る。

会場のホットリミットを越えた。

「…セシリア、力は見せる物じゃない。必要な時以外はしまってる。」

楓がセシリアに自分なりではあるが力の在り方を説く。

セシリアはその言葉を聞いたまま固まってしまった。しょうがないのでセシリアを引っ張って会場に戻す。

一夏が出てきた。

「交代するぜ。」

【ありがとう。】

楓がISを解除するとギャラリーが不振に思ったらしく話し声が聞こえてきた。

「楓ちゃん、IS解除しちゃったけどどうしたのかな？」

「さっきの勝負で疲れちゃったとか？あ、咲夜様だわ！キヤー格好いいー。」

若干織斑教諭の気持ちがわかった気がした。咲夜は周りの歓声にはほとんど呆れながらも一夏から目を離さなかった。

「咲夜、ISはどうしたんだ？」

ISを展開して一夏の問いに答えた。

「ISの二台持ち!？」

「嘘ッ!? 咲夜様も専用機持ちなの!？」

「専用機持ちクラスに多すぎて価値観狂いそう..」。

「なんだ咲夜お前専用機持ってたのか。いいぜ、特訓の成果を見せてやるよ！」

開始と同時に白式が突っ込んだ。

白式が切りかかると咲夜はブースターを使った宙返りをした。

「今のをかわすなんて流石だな！」

「あんたも大分扱いに慣れたみたいね!次はこっちの番よ!」

「ストライクレーザークローの使用を提案します。」

「オツケー、切り替えを頼むわ。」

咲夜は腕に装備しているストライクレーザークローを起こす。

「はあああああ!!」

ブースターを使って滑るように飛び、白式に近づいた所で全身のバネを使って飛び上がる。

普通のISなら機体自体が反応しきれない、異常な運動性能を使いこなした一撃は雪片二型で止められた。

「止められた！？…思った以上にやるじゃない…。」

「お互いのシールドはそれぞれ残り半分です。」

「知ってる！」

「雪片の能力の前ではシールドは無意味だと思われます。よって、シュナイダーの使用を提案します。」

なるほど、やってやろうじゃないの！

「ISC！シュナイダー！」

「standby SCHNEIDER ready」

パーツをシュナイダーに換装したその姿の特徴は各部位に装備されている7本の剣。

腕に二本、足に二本、肩から背中にかけて三本の剣がセットされている。そのほかに、手足にEシールドジェネレーター。

「形が変わったところで！」

「甘いわ!」

雪片二型で近接に持ち込もうとする一夏だが、シュナイダーの装備は完全近接用なのである。

咲夜は二本のレーザーブレードを使い、一夏の攻撃を防ぐ。

「ボディが甘いよ一夏!」

咲夜の剣技によって体がさらされ、胴が空いてしまった一夏。そこを逃さずシュナイダーの一閃が決まった。

「うああ!?!」

ダメージ209、危険度A+

「これで終わりよ!!!」

咲夜が距離を詰めて攻撃の体制に入る。

「くっ速い!…一度で良いから持ってくれよ。」

イグニッション・ブーストを使い、不意打ちにでる。

流石に咲夜も反応しきれなかったようで、大きな一撃を食らってしまった。

「いける!うおおおお!」

咲夜にとどめの一撃を刺す瞬間、一夏のシールドエネルギー残量が0になった。

「勝者、不知火咲夜さんです！」

山田先生の司会で、何が起きたか理解した咲夜。反対に一夏はまだ理解しきれてないようだ。

二人がピットに戻ると山田先生と織斑教諭と箒がこちらに向かってきた。

「織斑。チャレンジ精神は大切だが、後先考えるべきだったな。不知火、お前のあの動きはなんだ？」

「なんだって言われても。」

「そうだな、質問を変えよう。どこであの動きを習得した。」

戻ってすぐ教諭からの質問、いや恐喝とでも言いつべきか。兎に角視線が唯痛い。

「そうですね…答えはNOだね。誰からも習ってなんかないわよ。」

咲夜の答えに軽く目を開いた後、そうかと呟いて戻っていった。

「一夏！！！」

箒が駆け寄る。

「箒、悪い負けちまった。」

「そんな事はいいい、良い戦いだつたぞ。」

お前は全力を出し切った、と労いの言葉を重ねる。一夏は嬉しそうだ。

少し離れた所からセシリアが近づいてくる。

【咲夜。】

「じゃあ後は任せるわ。」

「あの…先程はごめんなさい。」

謝罪から入ったため、警戒を解く。

「まあまあ、過ぎた事だしあまり気にすんなよ。」

頭をぼんぼんしながら言うと、慌てふためきながら顔を真っ赤にするセシリア。

「ちょ!?!…いえ、これはこれで…/ / /」

「どうしたセシリア?顔赤いけど、頭でも打ったか?」

セシリアと箒は確信する。

おま え も か

「楓は鈍感だなあ、セシリアも先が思いやられるぞ。」

「夏がそついうと箒が逆上した。」

「お前が言っなー!!」

0の鼓動と集大成（後書き）

とりあえずセシリア編終了。短いけど長かった。

楓のISは悩みまくって何度か書き直ししてました。

ウィンドウオートとか知ってる人少なそうだよね。

因みに候補が上がってたのはスペリオルとかユニコーンとかジェフティとか。

反対に咲夜はライガーゼロ一択でした。

忘れてたけど後付け設定資料集書かなきゃ。この小説、検索エンジン片手に見ないとなにそれおいしいの状态になりますから。

べったんこ(前書き)

地震のおかげで家がやばい

べったんこ

「というわけで、織斑君クラス代表就任おめでとー！」

食堂の一角でささやかなパーティーのような催しが行われている。

一夏はテーブルの真ん中、そのとなりに楓と箒が座っている。

「楓、一つ聞いて良いか？」

一夏が不満そうな口で聞く。

「ん？ああ、いいぞ。」

「どうしてこうなった」

「それはですね！私たちが辞退したからですのよ。今回は楓さんと咲夜さんが緩衝材になっていたために一夏さんとは戦いませんでしたが、まともにもやり合ったら私が勝ってしまうのは自明の理。それ故、譲って差し上げたという訳ですわ。」

楓はセシリアの乱入で途切れてしまったが言いたいことは大体同じらしく、セシリアの意見に頷いていた。

「ちえっ。…にしても二人ともいつからそんなに仲良くなったんだ？」

しょうがないので話題をずらした一夏だったが、セシリアの顔が紅くなっていることに気がついた。

「セシリア、顔が紅いぞ？」

「そそそんなことありませんわ!！」

「大丈夫なの?…熱は無いみたいね。」

周りから歓声が溢れる。女子からの対応の為に咲夜に交代していたようでセシリアの顔が紅い事に気がつき、ヒョイと額を合わせて熱を計ったのである。

「ひゃうっ!?!なななにをしていらして!?!」

「何って、ただの体温チェックじゃない。」

そんな事をされたセシリアは顔を茹で蛸のごとく真っ赤にして走り去っていった。

「あんなに動けるなら大丈夫そうね。」

【…複雑な心境…】

「…理解不能です。」

「なによ二人とも訳の分からないこと言って。」

翌日

今日も今日とて織斑教諭の声が響く。

「ではこれより、ISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑とオルコット、それと不知火。試しに飛んでみる。」

「わかりましたわ。」

「りょーかい。」

まずはセシリアがISを展開する。

「ウインドウオート！」

周りからは不思議という目で見られる。しょうがない。

「ADA、モードハイゼンスレイ？でも使ってみるか。」

「了解、オプションコネクト。」

楓がADAに指示を出すと空間から高機動型であるハイゼンスレイのパーツが排出され、自動で換装する。

この間約一秒。

全身に渡るオプションの為に外見が大幅に変わってしまったている。

「形が変わった!？」

「来い白式!」

一夏は今までより早く展開する事に成功した。

「よし、三人は急降下と急停止を試してみろ。」

楓は前回の模擬戦の倍以上のスピードで飛ぶ。その速さはとても現行のISではだせないスピードであり、これには第四世代である白式ですら足元に及ばなかった。

「よし俺も!…(<・A・) <ウワァア!…」

勢いよく飛ぼうとした一夏だが飛ぶ練習は曖昧だったらしく、めちやくちやな方向に飛んでいつてしまった。

その後、三人が無事空中で並ぶと織斑教諭から怒声が放たれる。

「遅い!スペックならウインドウォートはともかく、ブルーティアーズより白式の方が上だぞ?」

「…そんな事言われてもなあー。空を飛ぶ感覚自体がまだあやふやだし。」

一夏がため息混じりに呟くと前にいた楓が様子を見に来た。

「まあ、結局は慣れだからな。要は気合いだ気合い。」

セシリアが楓に続く。

「織斑、グラウンドに穴を空けるとはどういう了見だ。馬鹿者め。」
地面に顔をうずめたまま謝る一夏。

「…ふみまへん…。」

ISを解除した楓がこっちに走ってくる。

「おい一夏大丈夫か？」

「…ぷはあ！おー楓か、ま、まあな。」

「情けないぞ一夏、私が教えへぶっ！」

「一夏！男の子ならこれくらい平気よね？」

いつの間にか楓と咲夜が交代していた。咲夜は一夏に近づくと、腕を持って一夏を心配する。

【なあDELEPHI、咲夜ってあんなんだっけか？】

〔私には理解不能です。〕

【奇遇だな、俺もだ。】

「ISを装備していて怪我などするわけなかるう！」

「人の心配をするのは当たり前じゃない？」

「人の皮を被った悪魔め。」

【うわあ、否定できない。これは無理。】

「人の形してるだけ嘛だと思っけど？」

「返しましたね。」

【複雑な気持ちだな。】

「お、おい。（この2人、なんでこんなに仲が悪いんだ？）」

放課後、校門の前にひとりの少女がたっている。

「ここがIS学園、フッ。」

不敵に微笑むと校舎の中に入っていった。

次の日

「もうすぐクラス対抗戦だね！」

朝から盛り上がる。

「あ、そういえば二組のクラス代表が変わったらしいよ。」

「なんとかって転校生でしょ？」

すかさず咲夜が突っ込む。

「なんとかってねえ…。」

「転校生？今の時期に。」

一夏は不思議そうに首を傾げる。セシリアが横で何か誇張しているが聞こえない。

「まあでも、専用機持ちは一組と四組だけだから余裕だよ。」

クラスメートのひとりがそういうと、まるでその言葉を待ってましたと言わんばかりに教室のドアが開かれた。

「その情報古いよ！二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単に優勝はさせないから！」

扉を勢いよく開いたその人物は、小さな少女であった。

一夏はその少女を見てキョトンとしていたが、我に帰ると少女に向かって声をかけた。

「鈴…お前鈴か！久しぶりだなあ。その口調すっごい似合っていないぞ？」

昔を懐かしむような言い方でさらっと酷いことを言う一夏。一夏の反応に顔色を変えた鈴は怒鳴った。

「なんてこと言うのよあんたは！」

一夏に怒鳴った直後、鈴の頭に鈍痛が走った。

「痛っ！何すんの!?!」

後ろにも向かって怒鳴る。だが後ろには織り斑教諭が立っていた。

鈴は青ざめた顔で

「げえ、関羽!?!」

今にもドラの音が聞こえそうだった。

「もうSHRの時間だぞ?」

相変わらずの冷たい視線で鈴を見やる。

「ち、千冬さん」

「学校では織斑先生だ。さっさと戻れ邪魔だどける。」

呆れ顔で言って教室に入った。

鈴は吐き捨てるように言う。

「また後で来るからね!逃げないでよ!」

「あいつが、クラス代表か...」

「一夏と仲よさげだけど、どういうこと?」

咲夜が威圧的に言うものだから一夏は気が動転してしまった。

「え？あ、あの咲夜さん？そんなにお怒りになると俺の腕があらぬ方向にいいいいいい！！」

食堂

「びつくりしたぜ？お前が二組の転校生だなんて。連絡ぐらいくれりゃあよかったのに。」

「そんなことしたら感動の再会が台無しじゃない。」

一夏と鈴は先ほどからずっとこの調子である。

一同「ぐぬぬ…。」

一夏と鈴はテーブルにつき、一同は他のテーブルで様子を伺っている。

「にしてもあんたがIS学園に入るなんてね。なんでそんなことになっちゃったのよ？」

「いやあそれは、簡潔にいうと試験会場を間違っちゃったんだよ。あ、そういえば俺と同じ境遇にあった奴がいるんだよ！紹介するぜ。」

咲夜はここぞとばかりに飛び出し、鈴を睨みつけて自己紹介する。

「どうも〜不知火咲夜です。」

鈴は唸っている。

「一夏、どこまで同じ境遇なの？この人女の子じゃない。」

一夏を見て思った事を言った鈴だが、その疑念は完膚なきまでに打ち崩された。

「わりいな、これでも俺は男なんだ。よろしくな、鳳。」

突然の声色の変化に鈴は身構えたが、咲夜の髪が変わっていることに気がついた。

「あんだ、どうなってんの…？」

「二重人格って奴だ。咲夜は女の人格で俺は男の人格なんだ。体も一応男だ。」

「カッコ良く言ってるつもりだけど、楓ちゃんスツゴク可愛いよね〜。」

奥の方で一人の女子がボソツと呟く。

楓はそれを逃さない。

「ファック！！ミンチにすんぞ雌豚ア！！！」

「キヤ〜！」

こんなやりとりで完全に退いている鈴だったがそこには一つの確信があった。

（咲夜って方は敵ね！）

「ったく…。んだ、一つ言い忘れてた。“専用機持ち同士”仲良くしようぜ。」

「専用機持ち」という言葉に反応を示す鈴。

「あんたも専用機持ちなんだ。クラス対抗戦で戦えないのは残念ね。」

「模擬戦ならいつでも大歓迎だぜ？」

「うーん、それはまた今度ね。クラス対抗戦に向けて特訓しなきゃならないから。」

「そうか、じゃあ俺は一夏の特訓でもしてやっかな。」

楓が言った瞬間今までいなかったセシリアと箒の二人が怒涛の勢いでやってきた。

興奮した二人は声を揃えて言う。

「「一夏の特訓をするのは私だ（ですわ）！！」」

「うおおう！…。ったくじゃあ一夏に決めてもらっか。一夏、誰が
いい？」

「勿論、あたしよね！」

【前振りも無しにでてきやがった！】

「いきなり俺に振るのか！」

まず楓がやれやれといった感じで提案をした瞬間に食いついた。無駄に入れ食い。

しかも楓は咲夜にコントロールを奪われている。

放課後

第三アリーナのグラウンドに沢山の生徒がいる。

放課後や土曜の午後から解放されているので多くの生徒が利用している。

アリーナの端で4人の男女がお互いに向き合っている。

「これはどういう事ですか？」

セシリアは一夏の目の前にいるポニーテールもとい箒を嫌悪感たっぷりの目で睨みつける。

箒はそれを横目で流し、打鉄の鞘から刀を抜く。

「どうということも何も一課の特訓をするのはこの私だ。」

「いいえ、私も参加させてもらおうわ。」

ISを展開させながら箒の言葉に真っ向から反論をぶつける咲夜。その視線はいささか突き刺さるものがあった。

「不知火さんだけにいいかつこはさせませんわよ?」
次いでセシリアも展開する。

その冷たいふいんき（なぜか変換できない）にため息しか出ない一夏だった。

「あのー、できれば一人ずつにしてもらえると・・・」

恐る恐る希望を出した一夏だが、それもむなしく三人まとめて襲い掛かってきた。

一時間もすると一夏は完全にバテてしまい、白式を解除して地面に仰向けに寝転んだ。

「はあっはあ…三人とも…俺を殺す気がよ…。」

「では、今日はこのあたりで終わることにしましょう。一夏はこれから私、セシリア・オルコットが特訓して差上げますわ。なんせ…。」

「全く、鍛えてないからそうなるのだ。大体…。」

一夏に一瞥をくれたあと、ぷいっと顔を背けながら語る二人を華麗にスルーした咲夜は一夏のもとに行って手を差し伸べた。

「ほーら、何時までもへばってないの。手貸してあげるから立って。」

「お、おう。ありがとな。」（なんでこんなびっくりしてんだ俺！？）

咲夜の柔らかい手に触れた瞬間独特の優しく甘い匂いに包まれた。一夏はそのことに耳を赤くしたが如何せん夜な為、咲夜がそれに気づくことはなかった。

「…て聞いてますの一夏さん、不知火さんあなた何をしていらして！？。」

「一夏！！貴様ああああ！！。」

3対1の演習のおかげでセシリアと箒の両名はさほど疲れてはいない。

再びISを展開した二人は一夏を殺す勢いで襲ってきた。

「待ってって！？今攻撃されたら確実に俺死ぬって！うわあああ！！。」

セシリアが放った《スターライトmk3》の一撃はすんでの所でかわされてしまった。

「外したですって！？。」

煙の中から出てくる二つの影。一つはISを展開していた。

「殺人は校外でやってもらえるかしら？」

それは一夏を抱きかかえた咲夜の姿だった。

「ちょっと、一夏が気絶しちゃったじゃない。」

「一夏さんを渡していただきますわ！ブルー・ティアーズ！！」

地上戦にも関わらず4つのビットで三次元的に攻撃するが咲夜にはかする気配すら感じられない。

「なんですのこの運動性は！？」

「私に任せる！はあああああ！！」

隙を見計らって打鉄の刀型近接ブレードを抜き、振りかぶる。

「甘いわ！！」

【咲夜、俺の堪忍袋が切れたんで交代するぜ？】

「えっ。」

【こいつらを黙らせる。異論は認めねえ。】

咲夜は反論しようとしたが無言の圧力がそうさせてくれなかった。

【非常に不味いわね…】

「範囲を指定して下さい。」

【良くて説教、悪くて…友達だから殺しはしないけど、ISの破壊までかな。】

「なかなかですね。」

「いい加減にしるよ、雑巾にモップ。人をなんだと思ってるんだ？」

静かに、しかし重たく。

興奮している二人は自分達が楓の地雷を踏んだことに気がつく余裕を持っていなかった。

「邪魔立てするなら！切る！」

「いい加減しろって言ったはずだ。たかだか人一人追いかけて回すのにISを出す意味が分からない。」

「膨大な魔力を検知。人類に対して生命の危険性有り。」

楓は魔力を少しだけ解放した。

「ぐうっ！？いきが…できな…」

「なんです…の…。」

魔力解放した楓から威圧感が何倍にも膨れた為、人間であるセシリアと箒には耐え難いほどの重さのしかかり、上手く呼吸が出来ないでいた。

「あと、反論もさせねーから。…じゃ、咲夜あとよろしくな。」

「そんな投げやりなことしちゃうの！？もう、交友関係スタボロじやんー！」

【大丈夫だ、こっちが友達だと思えばなんとかなる。】

「運任せってわけ…。埋め合わせはしてもらおうよ？」

【どうぞお好きに。】

「覚えといておくわよその言葉。…大丈夫二人とも？」

「バイタル測定。各部チェック、命に別状ないまでには回復しているので心配は入りません。」

「堅いこと言わないのDELEPHI。人を思いやるって事に意味があるんだから。」

「心配ご無用ですわ…。しかし、あのまるで魂そのものに直接のしかかる感覚は一体…。」

「こちら問題ない…。…一度楓と剣を交えてみたいものだな。」

咲夜は二人の回復具合に安心し、疑問には曖昧に答える。

「セシリアのは気のせい、篝ちゃんは止めたほうが良いと思うわ！まあそれはともかく、お腹空いたでしょ？食堂行きましょ！」

咲夜の必死の勢いに圧倒された二人はしぶしぶ頷いて食堂に行くためにピットに戻っていった。

「ぷはー今日はほんとに汗かいたな。」

「一夏！お疲れ、飲み物はスポーツドリンクでいいでしょ？」

ロッカールームでタオルを首にかけ、いすに座って休んでいた一夏のところへ鈴がやってきた。

「ああ、サンキュー！…プハア！生き返るぜ。」

スポドリを受け取った一夏は一度大きく飲むと、鈴が一夏に向かって言った。

「若いくせに体を気にしてるのは相変わらずね。」

「若いうちから不摂生はいけないからな。」

「ジジくさいわねー。」

「う、うるさい…。」

そんなやりとりをしていた頃にどこかに行っていた楓が戻ってきた。

「おはよう一夏。」

「おう、さっきはありがたてなんつうかっこしてんだ！…！…！早く服を来なさい！…！」

今現在の楓の姿はなんと上半身裸だった。

一夏と同様に鈴も楓の姿に絶句していた。

「な、なに!?!あんだ露出癖でもあるの?」

さつきからの発言に楓は心底呆れた顔で残念そうにため息を一つついで言った。

「何か勘違いしてるみたいだな。何度も言うが俺は男だ!。その一夏!なに鼻血出してんだよ!?!男の裸で鼻血出せるほどのHEN TAIだったとは恐れ入ったぜ!」

そこまで言われてやっと一夏は我に帰る。

「はっ!?!」

一夏は咄嗟に鼻を押さえ、ティッシュを充てた。

ふと隣を見てみると鈴がこちらを恨めしそうに見ていた。

「一夏。」

「な…なんだよ?」

「最ッ低!?!」

「なんでだよ!?!」

「あ思い出した。一夏、後で部屋に行く。既に篠ノ之には伝えてあるから。」

今度はちゃんと服を着た楓が言う。

“篠ノ之”というワードに食いついた鈴は一夏本人からfirst、second幼なじみの話を聞いた後、「幼なじみならいいんでしょ!」と喚きちらしながら部屋に戻っていった。

と思いきや。

楓は先ほどの発言通り一夏の部屋に赴き、扉を開いた瞬間。

「天誅!!」

木刀を鈴に振りかざそうとしているところに直面してしまった。

楓はすぐさま鈴を自分の体に引き寄せ、木刀を腕で止めた。

「なん…だと…!?!」

「全く、夜のハッスルもほどほどにしるよ?」

「今の発言は大変不謹慎極まりない物ですね。端的に言えば“最低”です。」

「うっせ。おい篠ノ之。」

「な、なんだ?」

「今の生身の“人間”ならなかなか危ない一撃だぜ、少しは懲りろ。」

先ほどとは違うあまり威圧感のない言い方に筭はしょんぼりするだ

けですんだ。

「ってあんた生身の腕でとめてたわよ!？」

鈴が口をパクパクさせて追求してきた。やはり状況を飲み込めてないようで、楓の腕を心配そうに見つめていた。

「んあ?こまけえこたあいいんだよ!」

べったんこ(後書き)

正直思った。これハーレム者なんだからとことんやってもいいよね
って。

つーわけでそのうちなんか増えます。

妄想してたらなんかにやついてた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1642p/>

anotherからの分岐点

2011年11月13日12時51分発行